37

広島原爆投下時の県並びに市医師会長の活動について

江川義雄

演者は本学会において、広島原爆投下にあって、広島市の代表的病院についての概要を発表したが、今回は被爆五十九年を迎えて、演題に示したような主題で発表するものである。原爆救護活動に関しての記録は数千部にのぼり、単に医療活動の観点からしても、その救護活動は医療機関の全滅的被害を救済する医療組織以外の多くの組織、団体などの献身的な参加活動は決して充分には知らされていない。

被爆より半世紀を経過しても、全人類を滅亡させる原子爆弾のグローバルな課題は今日迄、生々しい情報を伝えている。

被爆後世紀は変ったとしても、被爆された人達は殆どといってよい程死没し、その災害を知る人達は稀れとなりつゝある、それは広島、長崎などの地域、日本全土、外国の一部などに共通する事で、被爆後に出生した若い人達には更に疎遠で、どこの世界のことかという認識不足が必然的に波及し、不感症化しつゝある、それらの無智、無理解さが反覆されゝば全人類は生存の余地はないであろう。

現在も広島の地において、内外の被爆者並びにその二世における内外の検診、治療活動がなされており、世界各地において、このような事態が発生する可能性を誘発させる条件を有している、不幸にして恐る可き人為的な障害に対して、而も殆ど不知であった国民や医師達が、どの程度の知識を有し、その災禍予防に当っていたかを医師会組織の代表者をとり上げて、当時の活動状況がどうであったか、被爆の中心地であった広島市の吉田寛一博士の行動や、広島の周辺部も包括して医師達の指導責任者としての広島県医師会長、大原博夫博士の考え方につき言及して、これらの事態に対応する教訓を学びたいと思うのである。

最初に広島市医師会長、吉田寛一博士の履歴、業績か

ら述べてゆくと、スライドの示す吉田博士は広島県安芸郡江田島に明治二十七年に出生、広島県立中学・新潟医専、長崎医専に学ばれ、卒業後は法医、精神科、血清学、内科学を学ぶ、昭和六年六月広島市で内科、神経科病院を開設、地御前に分院を建てる。昭和十四年広島市医師会副会長となり、同十九年三月、市の会長になり、県会議員となる。原爆被爆まで僅かの会長であった。自宅で被爆し、体調不良をおして、臨時広島市病院院長として被爆者治療し、重症の自分も五十一歳で病没する。広島市々長も殉職し、市の医療行政の代表者であった助役・柴田重暉氏も重症であって、吉田博士に「九日陸軍々医部より、太田川上流可部町附近に赤痢患者が発生したので、市でも伝染病院を開設されたい」との申出があった、結果として八丁堀福屋百貨店の焼ビルを仮病院にあてることになったのである。仮病院長となった吉田博士は彼の研究歴と観察力から、下血症状は伝染病由来のものでないとし、医師として症状は赤痢として病死扱いする事は出来ないと、学究の鋭さをとき、犠牲的救護活動は助役を深く感動させた秘めたる事実は助役の「原爆の実相」に記述されている、医師の面目躍如たる医学的思考と行動に教えられるものである。

演題に掲げた被爆下の県医師会長・大原博士について大原博士は年譜にみられるように、若くから政治的天分をもたれ、広島県知事となられ勲二等瑞宝章を下賜され、県民より慈父のように慕われ、七十三歳で死亡された。

原爆被害に関した業績としては、大戦末期広島は軍事地・基地として全滅予想され、その被害の防止の為、都市の疎開、市中居住地医師の疎開を推進した医人であった。その当地の軍事・政治圧力に抗すること不可能であった。その被害を最小に抑えた行動は多少でもその勇気は讃えられねばならない。

（江川レディースクリニック）